

ミヘルス『政党の社会学』の 世界について（1）

氏 家 伸 一

目次

はじめに

1. ミヘルスの時代
2. 「進歩」について
3. 民主主義とモスカ

はじめに

ロベルト・ミヘルス（Robert Michels 1876-1936）の主著『現代民主主義における政党の社会学——集団活動の寡頭制的傾向についての研究』⁽¹⁾が刊行されて100年あまり経過した。ミヘルスには他にも、性道徳に関する大著をはじめ、ナショナリズム（パトリオティズム）、イタリアの労働運動と社会主義の歴史、経済学関係など多くの分野で研究成果を発表していた。そのなかには斯界で高く評価された成果もある。『政党の社会学』は、とりわけ政治学関係のテキストでは、オリガーキー・テー

(1) ミヘルスはドイツ、ケルンの豊かな商家うまれだが後にイタリアに帰化する。イタリア語文献では Roberto Michels と表記している。

Zur Soziologie des Parteiwesens in der modernen Demokratie: Untersuchung über die Oligarchischen Tendenzen des Gruppenlebens. 邦訳名は、南博／樋口晟子訳、木鐸社、1973年、による。邦訳はほかにもある。以下では『政党の社会学』と略称する。

ゼの著作として古典的地位をしめている。

『政党の社会学』に関する研究は、ヨーロッパ、アメリカ世界で数多く発表されており、今日も、様々の観点から研究成果が生み出されている。『政党の社会学』とそれに連なる著作についての共通の問題関心は、政党（と組織）と民主主義との関係にあったといっても過言ではない。これについては、シユムペーター以後のエリート論デモクラシーという問題枠組みが設定されて以降、一定の方向付けがなされたといえる。もっとも、それとの関連で、直接民主主義と代議制との比較的考察は、依然として注目されているテーマである。⁽²⁾

マックス・ウェーバーをして、「この種のもの一般の、最初の体系的な総合的考察」と言わしめた、『政党の社会学』が上梓されて、100年目の2011年は、ミヘルス研究の新しいきっかけとなった。

ミヘルスの主著の今日性は様々視点から検討されているが⁽³⁾、当時の研究環境の中では、画期的であり反響も大きかった。しかし、本書は政党研究の古典とのみ位置づけてすむものではない。モスカ、パレットとならんで、エリート理論のトリアーデの一人であり、その意味で、民主主義批判の書ともみられている。⁽⁴⁾最近の代表的ミヘルス研究者ティム・ゲネットは、ミヘルスを「社会学的研究のパイオニア」と呼んでいる。⁽⁵⁾いずれにしても、『政党の社会学』の意義は一義的に定義するのが困難であり、本書が複雑で多様な評価をゆるす著作であることは間違いない。

(2) 早河誠『代表制という思想』風行社、2014年。

(3) Harald Bluhm/Skadi Krause (Hrsg.), *Robert Michels' Soziologie des Parteiwesens Oligarchien und Eliten – die Kehrseiten modernen Demokratie*, Springer VS 2011, 第IV部「アクチュアルな読み方」参照。

(4) Jame Burnham, *The Machiavellians Defenders of Freedom*, 1949, 1970.

(5) Timm Genett, *Der Fremde im Kriege. Zur politischen Theorie und Biographie von Robert Michels 1876–1936*, Akademie Verlag, 2008. Tim Genett (Hrsg.) *Robert Michels Soziale Bewegungen Zwischen Dynamik und Erstarrung*, Akademie Verlag, 2009.

ミヘルス『政党の社会学』の世界について（1）

イタリア語、フランス語、英語をはじめ、おおくの言語に翻訳され（日本語にもすぐ、大正2年（1913年）に邦訳され、後にミヘルス自身1914年のイタリア語版序文でそれに言及している）、最後の1925年度版までに、かなり加筆訂正された。しかし、「ミヘルスの全業績と彼の思想の詳細な再構成⁽⁶⁾」という点では、未だ不十分な研究状況である。

『政党の社会学』の総合的研究が少ないことの結果、本書の理論的内容が「オリガーキーの鉄則」命題に還元され、彼の思想全体（その中での本書の位置と意味）の「複雑さと多面性」が考察されないことになった。

もっとも、それにはいくつかの理由がある。

(1) まず、ミヘルス自身が「オリガーキー鉄則」の名称に排他性と独占性をあたえたことがあげられる。つまり、自ら鉄則への安易な要約と還元をうながしたことである。

(2) 第二に、本書が多く言語翻訳されたことはさき述べたが、版によってミヘルスが手を加えたものもあり、『政党の社会学』自身の研究すらの版を対象とするのかで、解釈が異なってくるということになる。実際、1925年独語版には、ミヘルス自身が書いているように、多く加筆訂正が加えられた。のみならず、その間には第一次世界大戦とロシア革命、ドイツ革命とワイマール体制成立、そしてムッソリーニのローマ進軍という大きな歴史的事件が介在し、それらは第二版に少なからず、潜在的な影響を及ぼしていることは容易に推定できる。たとえば、第一版で献呈されたウエーバーの名が消えている。また、「戦時とオリガーキー」という注目すべき章も英語版にのみ書かれた。

このように、『政党の社会学』は種々の版で読まれることになった。（書誌学的研究が待たれるところである。）

以上の結果、ミヘルスの主著を歴史的脈絡の中で位置づけるという研究が容易ではなくなったといえる。

(6) Harald Bluhm/Skadi Krause (Hrsg.), S. 9.

(3) そしてなかならず強調されるべきは、ドイツ社会民主党 (SPD) 党員からファシズム支持者へというミヘルスの政治的伝記が彼の著作の総合的研究に暗い影をなげかけているということになる。『政党の社会学』についてもそれはあてはまる。極論すれば本書はミヘルスのファシズム転向への理論的な予備作業とみなしうるといふわけである。

にもかかわらず、『政党の社会学』の再構成と新しい解釈が今日的意味を持つ理由が存在すると、本書出版100年を記念して発表された論文集『ロベルト・ミヘルスの「政党社会学」——オリガーキーとエリート、現代民主主義の裏面』は主張する。(だからこそこの研究書が編まれたのだが。)

まず、本書は社会主義政党の内部精通者としてのミヘルスにしか書けなかった著作であり、SPD の特徴である、党内組織と構造、政策決定過程、社会的と心理的の緊張について、ミヘルスが本書に書きとめたものは、現代でも、政党社会学研究の基準点をなすといっても過言ではないだろう。⁽⁷⁾

その意味でも、新しい解釈は今日でも可能である。それほど、『政党の社会学』の世界は「多層的」であるといえる。

ミヘルスが本書で実証したのは、ウィルヘルム帝制時の労働運動では、その「民主的構造が逆転する」ということだった。それはドイツ政治史で自由民主主義の達成に失敗したことと関係する。(後述)したがって、本書はまず、その政治史的脈絡と関連づけて評価せねばならない。

しかし、それだけではすまないのが、ミヘルスの全著作のなかで、本書のもつ複雑な意義の所以である。

ミヘルスの著作は、このように、歴史的観点のみから重要なのではない。それが、ミヘルスの仕事が政治社会学のみならず、経済理論、歴史

(7) M. デュヴェルジェ『政党社会学』岡野加穂留訳、潮出版、1970年。

学，と学際的分野を「創造的かつ多面的に」統合しようとしたため，刺戟的であるのは本当だが，欠点もあげられる，と『政党の社会学』100年記念論文集序文は指摘する。それは，ミヘルスのアプローチの根本にかかわっており，概ね妥当するように思われる。

つまり，「労働運動の制度化と官僚制化のプロセスへの批判のため，制度それ自体の独自の価値が彼の視野から退いてしまった。」この点は，ミヘルスの民主主義観に関して決定的といえる。即ち，制度としての議会制にたいしてほとんど無関心であるのは，『政党の社会学』の最大の特徴であり，欠陥でもある。しかし，それも，ミヘルスの批判的視点からは止むを得ざる結果といえる。というのも，制度が，それ自身の目的を裏切っていくプロセス，制度の自己物神崇拜化という視点が，ミヘルスの近代分析の中心に存するからである。

たしかに，『政党の社会学』における党内政治分析の特徴の一つは，それが「人格化された政治」，つまり「人事」にこそ具体化され，そこに焦点が当てられている点に存する。そのせいもあり，次の欠陥として，政党と労組以外に，政治アクターを見いだせない点があげられる。極論するとミヘルスにとって，政治行動は，国家と政党にのみむすびついている。

この点で急いで付言せねばならないことは，ミヘルスの制度論への関心の薄さにも関係しているが，複数政党間の競争による民主主義という観点がほとんど欠落していることである。ミヘルスは，民主主義には強い関心を抱いているが，イギリスの自由主義制度への関心は希薄である。

次に，記念論文集序文が指摘する，『政党の社会学』に関する読み方の問題は重要である。これまでの，『政党の社会学』理解とミヘルス観に対する痛烈な批判だからである。すなわち，『政党の社会学』を「一人の著者の著作という，統一的なものとみなす」誤りである。その結果，『政党の社会学』のなかに，既にミヘルスの後のファシズム擁護を読み込むという誤解へと導いただけではなく，彼の民主主義批判を民主主義

の拒絶と混同することを意味するのである。」

「ミヘルスの思想と『政党の社会学』は、複雑な意味構造、多層的な意味連関を持つ著作である」ということは繰り返し指摘しておく必要がある。(系列的、時間的にだけでなく)「ミヘルスの民主主義概念は多面的あり、一貫性に乏しい。従って、各々の著作の歴史的脈絡のうちに位置づけ直さねばならぬ。」

学問(学者)としての一貫性に欠けるという批判は、後期ミヘルスにこそあてはまる。「ファシズム体制と、ファシスト党の内的構造、政策決定過程、社会的緊張についてミヘルスが沈黙を守ったこと」は、ペルージャ招聘のためとはいえ、研究者というより「ファシズムの文化大使」⁽⁸⁾に変身したことを証明している。

本稿で対象とする、『政党の社会学』までの青年ミヘルスの時代に限った研究では、彼の政治活動との関連で丹念に実証的研究を行ったフェッラーリスの研究を頂点として、新たな展開がなされている。ティムの大部の著作は、ミヘルスの人生と著作の全範囲にわたる、浩瀚なものであり、これまでのミヘルス研究の成果の集大成の感を呈している。ティムはミヘルスの著作集も編んでいるが、その統一的指針は、労働と女性と民族の解放を目的とする「社会運動」という視点にあった。ティムの功績の重要性は、「社会運動」という統一的視点からミヘルスの様々の分野での著作を総合的に関連付けようとしたことである。

『政党の社会学』100記年論文集で編者が述べたように、これからのミヘルス研究に課せられた課題の一つは、主著『政党の社会学』を、他の著作を含めた、青年ミヘルスの思想活動全体の中で位置づけ、そのうえで、主著の生まれた時代の思想環境の中で再評価することであろう。それなしに、後期ミヘルス(ファシスト・ミヘルス)と、『政党の社会

(8) ミヘルスのファシスト党への入党は、ローマ進軍直後の1922年というのがいままでの解釈だったが、それが1928年、つまりペルージャ大学就職と同じ年であることがティムにより実証されている。

学』の世界」との関係について語ることはできないだろう。本稿は、そういう意図のもとに、主著の世界と他の思想世界（ミヘルス自身の世界、そして同時代の世界）とを総合的に考察しようとするものである。極端な事例をあげれば、『政党の社会学』とブルジョア的性道徳の研究とは、ミヘルスの中でどう関係するのだろうか。（フェッラーリスは、『政党の社会学』には女性に関する言及が皆無にちかい、と慨嘆している。）

1. ミヘルスの時代

ミヘルスの知的形成がなされた時代、すなわち『政党の社会学』が準備された時代、1900年を挟んだ数十年は、歴史上一般に帝国主義の時代と称される。しかし、英仏に対して独伊は帝国主義的發展ではおくれであり、そのためイタリアでは、「プロレタリア国家」などという独特のナショナリズムを生み出していた。帝国主義の経済的余剰は労働者大衆にもゆきわたり、「労働貴族」も誕生した。

帝国主義は対外的な膨張侵略のイデオロギーを生み出しただけでなく、体内的にも対労働者、対社会主義の取り込み戦略がみだされた。フランスのミルラン、イタリアのジョリッティ体制にそれがうかがえる。

一方、社会主義陣営は1889年に第二インターを結成し、ドイツの社会民主党 SPD を中心に、労働者の国際的団結、戦争反対と国際平和の旗印の下に組織的發展を遂げていた。

社会主義運動は、19世紀から始まる自由主義の民主化において重要な役割を果たしていた。ドイツとイタリアでは、民主化の唯一の担い手とみなされるほどであった。イギリスの自由民主主義に対して、社会民主主義といわれるゆえんである。それには、両国のブルジョワジーの経済的と政治的の成長という問題が関係し、実はそれはミヘルスの階級分析で焦点をなした問題である。

社会主義運動はもうひとつの大きな問題を提起した。すなわち、労働運動の組織化と社会主義政党の問題である。そもそも古典的自由主義は、

自由で独立した市民によって構成される議会を、その政治活動の中心的舞台としていた。いわゆる「名望家」による政治の独占である。資本主義的産業化の進展とともに、都市に大量の労働者大衆が出現し、その生活改善、労働現場の諸条件改善、年金と保障などの生活保障、教育と選挙権、そして女性と子どもの人権をめぐる、政府と社会に対して、請求と反逆の運動を展開するようになるのは時間の問題であった。マルクス主義を代表とする社会主義思想がその運動の組織化を開始し、政治表現として政党が結成される。その際、労働組合（相互扶助組織や消費組合を含めて）と社会主義政党は、国ごとに様々な発展を見せたため、一応別々のものと考えたほうがよい。

社会主義政党の誕生は、いわゆる大衆民主主義の時代の政治の中心的現象といえる。議会政治は名望家個人から大衆組織を背景とした政党政治家へと担い手を変える。これが古典的自由主義の危機と言われる変動の基礎にある。従って、古典的自由主義者は（モスカもその一人）、社会主義に対してのみならず、大衆組織としての政党にたいしても疑惑と反感を抱く。

イタリアでは20世紀初頭の議会政治はジョリッティ体制といわれる独特の展開を遂げていた。トラスフォルミズモは古典的自由主義と社会主義の双方にとって、議会政治の墮落以外の何者でもなかった。イタリアにおける反議会主義は実際上もイデオロギー上も、強力な地盤を有していたことになる。しかも、イタリアの国政レベルでは、議会制民主主義は浅い歴史しか有せず、そもそも国民国家レベルでの基盤は甚だ不利な状況にあった。南北格差と低い識字率がその最も分かりやすい、代表的事例である。

青年ミヘルスの時代はほぼ、トリノ時代に相当する。ドイツ、ケルンうまれのミヘルスがなぜイタリア、トリノへ移住することになったのか。

重要な理由として、ドイツ・アカデミズムの閉鎖性にあることは、衆目の一致するところであろう。マックス・ウエーバーがそれを痛烈に批

判したこともよく知られている。対して、イタリアの大学はイデオロギーや性にかんして大変寛容であったことはミヘルスも認めている。

トリノはそういうイタリアのなかでも自由の雰囲気にあふれていた。イタリア中から俊英の学者がトリノ大学にあつまっていた。ミヘルスとの関係では刑事政策学者チェーザレ・ロンブローゾ、その弟子のエンリーコ・フェッリ、そしてガエターノ・モスカが挙げられよう。自由な雰囲気により政治的立場をこえて交友の世界が形成されたことも、ミヘルスが記している。そういう思想的交流が『政党の社会学』に反映していることは十分にうなずける。（ビーサムはミヘルスがトリノに移転した⁽¹⁾1907年をミヘルスの思想的発展にとって決定的であったと述べている。）

1902年よりトリノ大学で経済学教授の地位にあったアキッレ・ロリア⁽²⁾（1857-1943）は、1910年、ミヘルス紹介文を書いている。

「すべての理想に開かれた寛大な頭脳」とミヘルスを評する一方で、ロリアは他の隠れた面をも見通していたようである。すなわち、青年ミヘルスにおいては、他の多くのインテリと同様、「科的志向の魔術的水盤は、底の方に、毒のある悪酔いの成分を含みもつ」とのべている。不気味な予言というべきか、それとも、ミヘルスの頭脳と知性の特質を透視したものなのか。

ともあれ、ロリアは当時のトリノの知的環境、つまり、青年ミヘルスの知的活動の背景を描き出しているが、それは、青年ミヘルスの思想を理解するうえでも、必要かつ有益な知見であろう。

ロリアによると、当代のインテリは嫌でも「社会批判」に関わらざるを得ず、「社会主義者」とならざるを得ない。その社会主義は、「気高く、

(1) Beetham, David, *From Socialism to Fascism* – The Relation between Theory and Practice in the Work of Robert Michels, *Political Studies*, Nr. 25, 1977.

(2) Achille Loria, “Un Intellettuale Italio-tedesco,” *Nuova Antologia* (1910)

まじめで、高邁な社会主義であり、人類の恐怖と圧制への反響として屹立する」ような社会主義、「正義と平和的世界」の先駆者としての社会主義なのだ、と。

青年未ミヘルス像に符号する、そしてイタリア的な社会主義といえるかもしれない。

トリノは、何世紀にもわたって、すべての哲学的寛容のゆりかごであった。そのため、「世界中の剥奪され拒絶された者に優しい魅惑的な避難所」を提供してきた。

そして、他の、ヨーロッパの知的世界と同様、インテリサロンがトリノでも設けられた。これは、ミヘルス自身が「ロンブローゾ」論でも触れていた。ロリアによると、ミヘルス宅でも同様に、そこには、社会主義者のみならず、保守主義者も、また文学者や詩人も集っていた。青年ミヘルスが、何ゆえほかならぬトリノへの移住を決心したか、その理由の一旦が伺える。

かくして、ケルンのブルジョアうまれの青年において、「ラインのファウストとイタリアのエレナとの精神的結婚」がなされ、ミヘルスは、マッティエーニに準えることができる、「コスモポリタン」なのだ、とロリアは評している。

2. 「進歩」について

19世紀末から20世紀はじめにかけて欧州世界は楽観的なムードにみだされていた。芸術分野での「ベルエポック」が時代全体の表象となっていた。マルクスの墓標に、エンゲルスが「ダーウィン」の名前を引用したことから分かるように、19世紀後半に「進化」が社会思想史上の共有財産となっていた。もともと生物学上の概念が、資本主義社会のダイナミズムを表し正当化する概念として定着したのである。「生存競争」はまさに、資本主義そのものであった。それは「社会ダーウィン主義」と呼ばれた。イタリアでもたとえば、モスカにもそれは現れている。後

述するように、この関連でのモスカとミヘルスの対比も興味深いテーマである。社会科学の方法としての生物学，という問題は今日でも論争的になっている。とりわけ大衆社会現象に脅威を抱いた古典的自由主義者たちは、生物学（動物学）上の比喩で大衆をイメージするのを好んだ。

ともあれ、「進化」思想の及ぼした影響は大きく、それとの関連で「進歩」が当時の社会学関係の学界で論争的になったようである。背景には、帝国主義と進歩との関係という問題があったことを銘記しておこう。思想の時代背景は、ミヘルス理解にも必須なので、少しく詳しく触れておこう。

ミヘルスとはほぼ同時代の作家、オーストリア系ユダヤ人シュテファン・ツヴァイク（1881-1942）はその自伝『昨日の世界——ヨーロッパ人の回想』⁽¹⁾で、自分の育った第一次世界大戦前の時代を、「安定の黄金時代」を呼んでいた。当時の人々は、それ以前の時代の、「戦争や飢饉や革命のあった苦しい時代」を人間がまだ未成年で十分に啓蒙されていなかった時代、と見下していた。「今日、最後の悪と暴力沙汰とが終極的に克服されてしまうのは、あとほんの数年間のことだと思われた。そして止まることのない不断の「進歩」というものに対する信仰は、その時代では真に宗教のような力をもっていた。人はたしかに、バイブルよりもこの「進歩」をいっそう信じていた。そしてその福音は、日々新たな科学と技術との奇蹟によって、論議の余地のないほど証明されているように見えた。」進歩は科学と技術に止まらなかった。「社会的な問題に進歩が見られ」、諸権利が人々に認められ、裁判もより人間的になった、という。「そして問題中の問題、大衆の貧困という問題も、もはや克服できないものとは見られなくなった。……人々は、ヨーロッパの諸民族間の戦争というような野蛮な逆行を、魔女や幽霊を信じないように、信じなくなった。」

(1) 『昨日の世界——ヨーロッパ人の回想』原田義人訳、みすず書房、1975年、19-20頁。

しかし、ツヴァイクは、死を前にした時点で慨嘆する。

人々は、「あの理想主義に幻惑した時代が、人間の技術的進歩は同じように急速な道徳的向上を無条件にもたらすと信じたその楽天的な幻覺」を「冷笑」する、と。

「進歩」が時代の一般的雰囲気とするなら、思想史上は「実証主義」とそれへの反逆の時代といわれる。

しかしバウマーによると、注意すべきは、反逆にもかかわらず、実証主義は根強く延命した（再生、上昇、すら）していたということである。

「かなりの数の人文主義者たち、なかでも、社会学者たちや社会改良主義者たちの大部分は今も、そろって、科学あるいは理性によって進歩を達成できるという確信を表明していた」からである。

ロンドン大学で初めて社会学の講座を担当することになる、新自由主義者の T. ホブハウスは「進歩する精神」(1901)を書いていた。⁽²⁾

世紀末に始まった思想の「反逆」は、実証主義に対してだけではなかった。それは、「中産階級的な価値と因習のおりなす模様全体、ならびに中産階級的な合理主義と因習性全体に反逆した世界であった。」

実証主義への反逆は1860年代にはじまり1890年代に頂点に達した、とされる。しかも、この反逆は「非常に広い戦線」で起きた。「ヨーロッパ最高の知性のもちぬしたち」の多くが、それに加担した。

何についての反逆か。

「科学崇拜に対する反動」である。なぜなら、それが、「生命と精神とを軽視するものと信ぜられた」からである。この「科学主義への反逆」の焦点は、もっと正確には、「科学があらゆる知識を自己の領域に起きる」と信じたこと、そして、決定論の思想とにあった。⁽³⁾

(2) ホブハウスの「進歩」概念等については、次を参照。ノーマン・ウィントローブ編『自由民主主義の理論とその批判』氏家伸一訳、晃洋書房、1992年、上巻、121頁以下。

(3) フランクリン・L. バウマー『近現代ヨーロッパの思想』鳥越輝昭訳、

ミヘルス『政党の社会学』の世界について（1）

科学と決定論対主意主義，これがミヘルスの思索の底を流れているモメントであることを記憶しておこう。また，実証主義批判は民主主義と社会主義にも関わってくる。

青年ミヘルスの住むイタリアでは実証主義に関わる状況はどうであつたろうか。ミヘルスを位置づける，いわば座標軸を設定する上で有益な情報を，ノルベルト・ボッピオは『イタリア・イデオロギー』で提供してくれる。

ボッピオはイタリアにおける実証主義の特徴を述べたあと，それが「社会科学の進歩」をうながしたことに注目している。犯罪学でのチェーザレ・ロンブローゾ，政治学でのガエターノ・モスカに加えて，経済学，社会学，民俗学，心理学をあげている。いずれも，青年ミヘルスの活動に，さまざまに関係してくる人物と学問分野である。

ミヘルスが知的活動を展開し始めていた時代のイタリアのイデオロギー事情をボッピオは次のように簡潔にまとめている。

「イデオロギーという観点から見れば，実証主義は，産業革命についての進化論的で，自然主義的で，本質的には楽観的な解釈を，企業家的精神に富み攻撃的な自由主義と，漸進主義的で防御的な社会主義という，政治的に対立する二つの版……において表現していた。前者の守護神はダーウィン主義者のスペンサーであり，後者のそれはダーウィン主義的に読み込まれたマルクスであった。」

イタリアの社会主義者は，アキッレ・ロリアやエンリーコ・フェッリをはじめとして，（アントニオ・ラブリオーラを除いて），ほとんどすべてが，「熱狂的な実証主義者であり，まさにそれゆえに，中途半端にしかマルクス主義者ではなかった。」

「自由主義的傾向の右派実証主義と社会主義的傾向の左派実証主義を超えて，実証哲学は……（自然とかわるところなく）歴史の発展を支え

る客観的法則の認識」によって、資本主義の諸問題を解決できると考えていた。

さて、こういう実証主義への反逆は、同時に、「政治的な批判」でもあった。

「『新しい世紀』の始まりをつげることになった反実証主義の動きは、ただたんに哲学的な批判に尽きるものではなかった。それはまた、政治的な批判でもあった。反人文主義的な決定論、無味乾燥な自然主義、社会学的な粗雑な単純化、生の事実の無邪気な称賛、人間のその環境への還元、こういった実証主義の諸特徴に抗議する哲学上の論戦は、旧秩序を揺り動かしてきた改革の理念、権力の基礎の民主主義的な拡張の要求、新しい社会諸階級の上昇、等々に敵対する政治的な議論、一言でいえば民主主義と社会主義に敵対する政治的な議論と歩調を合わせていたのである。⁽⁴⁾」

こういうイデオロギー的布置状況の中でミヘルスを位置づけると、たしかに反実証主義の側に当てはめたくなる。他方で、ミヘルスのもう一つの足は、実証主義の精神にもおろしているように思える。科学と教育の議論にそれがうかがえる。

ただし、マルクス主義との関連では、はっきりと反逆の陣営に入っていることは確かであるが、それは史的唯物論批判につながってくる。

『政党の社会学』を書いた動機に、修正主義と改良主義、議会主義に占領された SPD に対するルサンチマンがあるのだとは、しばしば指摘される場所である。

「実証主義との闘いは、20世紀初頭の時代の文化を特徴づけるものであった」と断定するボッピオは、急いで付け加える。「しかし、実証主義に対する批判は、常に社会主義批判、民主主義批判……をともなっていたことを忘れてはならない。」言い換えると、いくら「凡庸」な哲学

(4) ノルベルト・ボッピオ『イタリア・イデオロギー』馬場康雄＋押場志訳、未来社、1993年、15-20頁。

でも、実証主義は、「近代化」に関連する文化過程と結びついていたこと、従って反実証主義と、民主主義や社会主義との関係は単純ではない。ポッピオも、なにものも「ひとくくりにするわけにはいくまい」と適格に忠告している。すなわち、反実証主義の場合には、「実証主義の機械的、歴史的決定論に対する批判」と「野放図な自由主義」、「せせこましく、こざかしい理性に対する批判」と「非理性と没理性」とを区別せよ、と。更に、「民主主義批判の場合にも旧秩序への哀悼の思いと無秩序の弁護とを、生まれつつある大衆社会の中に埋没しそうになっている個人への懸念と超人の賛美とを、労働者大衆の新しい道徳への不信と雇用者側の道徳の容認とを、下層民への恐怖と専制への呼びかけとを、政治階級ないしエリートの理論と貴族の（さらには戦士の）称揚とを」峻別せよ、⁽⁵⁾と。この指摘はミヘルスとの関連で非常に示唆的である。

さて、『政党の社会学』と同じ頃に書かれた興味深い論文に「進歩について」がある。

ローマで1912年に開催された国際社会学界でなされた報告が基になっている。（大会の共通テーマが「進歩」であった）

もう一つの「進歩」論文を「社会学古典叢書」として復刊した編者 Raffaele Federici は、その動機を、ミヘルスが「近代の問題で、産業社会とその合理性の問題」に注目を寄せたからと語っている。

従って、この小論はミヘルスにおける『政党の社会学』の思想世界の背景をなすミヘルスの時代観と歴史観を知るうえで有益である。

ミヘルスをエリート論者に矮小化するのは、「正確な評価」にはつながらない、との編者の判断には同意できる。というのも、ミヘルスの進歩観念には、パレト、ウエーバーのみならず、「生の哲学」、新カント派、そして依然としてマルクス主義の影響が伺えるからである、⁽⁶⁾と。

(5) 同上、63-64頁。

(6) Roberto Michels, *Intoruno al problema del progresso*, a cura di Raffaele

さて、19世紀末から20世紀初頭までの時代、急激で巨大な変化が生活のあらゆる分野で引き起こされた。科学技術の発達による生活全体の大きな革命がなされた時代であった。したがって、科学と「進歩」への揺ぎ無い信頼が支配的になっても不思議ではない。そういう時代の自己意識にミヘルスは、いわば冷や水をあびせるような主張を展開したといえる。

概念としての「進歩」は「相対的、あいまい、主観的」である、と。よって、「革命、進化、反動、思想の自由、抑圧、反動、民主主義」も、「人間の進歩」にとって、積極的ともなれば、消極的ともなりうる、と。ミヘルスお得意の、ジャーナリスティックなキャッチフレーズをつかえば、「進歩の行程は、死体でみちている」というわけだ。

しかし、ミヘルスは、「進歩」というものを完全に、絶対的に、どこにも認めないというのではない。容易に推測できることだが、経済的・技術的な進歩は「否定し難い事実であり、唯一の明白な進歩となる」と認めている。ただそれと、社会的・人間的な進歩とが一致しないというのである。

工業化による生産拡大は、「有害な社会的後退」をもたらしたからである。19世紀後半のイギリスでは、人民は窮乏化し、売春が横行した。いわゆる近代文明の光と陰の問題である。

工業化は「平和」ではなく、現状維持、そして既得権としての権力にむすびつき、「人種的抑圧や抹殺の道具」となることもある、と。

「一面で平和のもたらす進歩も、他面で、民族の権利主張の邪魔にもなりうる」からだ。

民族主義については、その「国境を超える心理学的本能」に触れ、

Federici, 2011.

ここで取り上げるのは次ぎの論文である。

“Considerazioni sul «progresso»” (a proposito del congresso internazionale di sociologia), *Nuova Antologia*, 1912.

ミヘルス『政党の社会学』の世界について（1）

「民族拡張主義の法則」と呼んでいる。ミヘルスは、そこから導きだされる倫理的含意を付け加えている。すなわち、「強い国民は本質的に不正義」であり、反対に、「抑圧された弱い国の方が正当で正義である。」

要するに、「進歩」概念は科学とは相いれない。せいぜい、「どの進歩、どの視点から、どういう前提で」進歩をかたるのか、をまず確定する必要がある、というわけである。

資本主義経済の高度化が、貧困と売春、移民と失業をもたらしたという事実認識のために「窮乏化論」のマルクス主義に依拠するには及ばない。19世紀後半の経済学の共通のテーマであった、といわれる。

ミヘルスは、進歩の評価は「健全な相対主義者」によってしかなしえない、と述べているが、これをペシミストと判定できるか否かは容易に決められない。

エリート論者3人組は、その「学問の展望」において「人類学的ペシミスト」と呼びうると、Raffaele Federici は述べている。モスカは「自由主義的議会制」に対して、パレトは人間の非合理的「残基」に対し、そしてミヘルスは党内民主主義への懐疑によって。

しかし、「科学的」とペシミストとは次元の異なる判断ではないか。科学的だからペシミストとなる、との命題には無理があるといえよう。

3. 民主主義とモスカ

『政党の社会学』序論第一章のタイトル「民主主義的貴族制と貴族制的民主主義」は、あきらかにモスカの問題提起に答えようとしたものである。同時にこの部分は、本書を書かせる隠れた動機ともなった、近代ドイツの政治分析でもある。

モスカは、トリノ大学1902-03学年度の開講講演（おそらく大学全体を対象としたもの）を、「貴族制の原理と民主主義の原理」と題して行った。⁽¹⁾「専門的」なものではない、と断っているように、分かり易く語られている。後に「過去と未来における遺族制の原理と民主制の原理」と

修正され公刊された。ミヘルスもこれを利用している。

モスカの意図は明白で、アリストテレス以来の伝統的な政体3分類に対して、それよりも古い考えとして、貴族制と民主制の2原理説を復活させることであった。

モスカは、民主主義の2類型を区別し、第一の「多数者」の信託を受けた政府は実現不可能と切ってすてる。それに対して第二のもの、すなわち、「権利上も実際上も、すべての人に、支配階級への接近が開かれている」体制としての民主制は認知する。これをモスカは、「社会的卓越のための闘いで、生まれによる利益が一切存在しない」こと、と説明し、これを反アリストテレス派（つまり、エリート論者）も否定はしないと、と述べていた。明瞭に、社会ダーウィン主義の影響が伺える。もっとも、適者生存説は人間社会には妥当しない、とも主張していることを付け加えておこう。

モスカにとって、貴族制と民主政の原理は、互いにせめぎあうことでダイナミズムを生む。どちらか一方が他方を圧倒することを意味しない。民主主義は動物とは別種の人間の発展の源をなすとモスカは主張する。むしろモスカは歴史を「保守的と民主的の不可避の繰り返された闘い」と考えている。

さてミヘルスは先ず冒頭で、「絶対王政」を「もっとも限定されたオリガー」と呼んでいる。君主制とオリガーキー（ないし、貴族制）は、アリストテレスの分類では、別々のものであった。ミヘルスには他の意図がある。

神授説にもとづく君主制論を論じ始めたのは、その対極にある民主主義を説明するためでもあった。「君主制の正統化は、天上からくる。神すなわち地上ではなく、超越的な天上世界に拠りどころを持つ限り、従っ

(1) G. Mosca, "Il principio aristocratico e il democratico," in *Partiti e Sindacati nella crisi del regime parlamentare*, 1975.

てそれは、永久に不易」ということになる。それは、「人間の法、従って人間の意図」の影響を受けない。従って、「君主制の法による、司法による、そして正統な廃止は不可能」、ということになる。

では君主制の廃止をおこなうのは誰か、またどのようにしてか。抽象的には、神のみである。しかし、神の意図は、はかりしれない。

民主主義はその対極にある。まず、「抽象的には」、一者の他者への権利を否定する。つまり、法のもとでの平等である。「共同体の諸価値への接近」を各人に容易にすることで、市民の各人に、社会階梯のトップへ登る可能性を与える。これは、先に述べたモスカの影響を歴然と示している。

君主制は君主個人の意思に依拠するため、「善意的で、技術的に効率的な統治」の保障はないが、民主主義の方は、統治の有力な諸条件に関して責任を担い、共同体全体に責任を有する。民主主義がその共同体の唯一の調停者である。このように、ミヘルスはモスカの思想圏の中にいることは明らかである。

既述したように、モスカにあっては、「いわゆる民主主義は支配的少数者が形成される基準のひとつ」となる。

つきつめると、モスカは民主主義を、政治階級が自らをリクルートするその一様式となり、その意味で、貴族制の一手段として、その存在を承認しているということ、である。

対してミヘルスは、民主制と貴族制とが相互乗り入れ状態であることを、「実際の政治生活の観察」からひきだす、つまり両者はアンチテーゼなのではない。要するに、数の問題となる。政権担当者が人口中の50%になった点で、両者は出会うということ。数の問題でのみ考えると、その通り、である。

しかし、次の認識でモスカとミヘルスは異なる。モスカにとって、歴史は貴族制と民主制との「永久の戦い」の歴史なのだが——その内実は新旧の少数者同士の戦いである——ミヘルスは、古

い貴族制は、近代になってすっかり解消してしまった、という。

保守主義ですら、民主主義の衣装を身にまとうことを好む。この民主主義への傾向は、国家の場合よりも政党の場合により強く示される。

ミヘルスによると、ほとんどの政党は多数決原理に基づいている。保守的な政党ですらそうである。ちなみに、名望家政党ではなく、大衆政党になったものが対象だが、そもそもミヘルスは政党の発展史にはほとんど触れていない。

モスカは、自己の政治階級論の傍証として、オストロゴルスキーを参考にしている。つまり、政党内でもその原理が貫徹している、と。

民主主義国では中産階級が支配階級である。「これらの階級は、政党を支配する集団や選挙活動を行う委員会において常に優勢であり、大部分、日刊紙の幹部記者や論説スタッフ、官僚機構の人材や軍隊の将校たちを供給している。⁽²⁾」しかし、モスカの時代、この中産階級は没落した、とされる。つまり、ドイツ同様に、イタリアでも自由民主主義が実現する条件がなくなったことになる。

ところで、現代の研究には、モスカのエリート論と政党は原理的に相容れないとする分析もある。つまり、彼の支配階級論には政党の入る余地は存在しない、と。

パオロ・ファルネーティは言う。

「経済団体[組合]や大衆政党といった中間団体に、介在する諸満足の形成を認めることは、開かれた少数者という原理のうえに打ち建てられた均衡への侵害である。開かれた少数者が駆使する包絡の技術の中にこそ少数支配的自由主義の現実性が存在する。」

モスカの政治理念からみれば、当代のイタリアに必要と思われるのは、社会主義者とカトリックを「自由主義のゲームのルール」に引きずり込むことであった。この観点からすると、「組合や政党は政治階級の適切

(2) ガエターノ・モスカ『支配する階級』志水速雄訳、ダイヤモンド社、1973年、408頁。

ミヘルス『政党の社会学』の世界について（1）

な形成を妨害するもの」でしかなかった。⁽³⁾

ところで、ミヘルスが民主主義の議論から何故政党論へと移ったのか、その必然性については、ミヘルスの後のテーマとなる。

政党は国家の場合よりも、より強く民主主義への傾向を示さねばならない。少なくとも、大衆社会での自主的組織としての政党は「多数決原理、大衆の原理」に基づいてつくられるからである。国家の場合は、身分制の名残が強い国家もあれば、君主制国家もある。

民主主義の時代、保守主義も変容を被らざるを得ない。ときには、貧者の側に立って「革命的」にもなろう。ミヘルスは大衆の時代の政治を決するのは究極のところ大衆自身であることを認める。ただし、同時に、その大衆自身も変わり易いということは、つまるところ、民主主義の時代、「民主主義体制に終焉をもたらすのも大衆自身である」とミヘルスは主張する。後の歴史を知る我々にはとっては、甚だ不吉な予言であった。

民衆の「苦悩」を知った保守主義者は「革命的プロレタリアート」と手を組み、「民主的資本主義の搾取」に立ち向かうこともある。言い換えると、大衆の力を借りてこそ、保守主義は「復活」しうる。

「民主主義的資本主義」の概念とか、「満腹の金満家のオリガーキー」という概念は、民主主義や資本主義やオリガーキーの概念を混乱させる印象を与える。ミヘルス独特のレトリックであるが、批判対象として資本主義とブルジョア・デモクラシーを置いてみると、理解が容易になる。

「民主主義は人民の意志の民主的方法で抹殺されねばならない。民主的方法が、古い貴族制が更新された支配を再建できる唯一の実行可能な方法である。ミヘルスの中で、民主主義が両義的性格を持っていることが分かる。方法としてという観念は今日の民主主義概念にもつながっている。

(3) パオロ・ファルネーティ『危機と革新の政治学——イタリアのデモクラシー』馬場康雄訳、東京大学出版会、1984年、33頁。

保守派でさえ、労働者有権者にアピールする必要があるという例として、ミヘルスはイギリス保守党のいわゆる「トーリー・デモクラシー」を挙げる。さらに、「議会的な政治が知られておらず、だが、普通選挙権が認められている国——（ミヘルスは名指しはしていないが、ドイツがその代表であろう…引用者注）——ですら、貴族の政党は、大衆の好意をあてにする。」

ミヘルスはこの章で、保守的政治家に対する、「普選の影響力」が強大であることを具体的に描写しているが、それは、「民主主義の時代」の不可逆性を説いている、と考えられる。

保守主義が、少なくとも選挙時には、大衆を当てにせざるを得ないと同様、リベラルも、大衆に期待は懸けないとしても、大衆は「必要悪」、以外の何者でもない。

ドイツのリベラルは一貫して「普選」に反対してきた。ドイツもイタリア同様、自由主義と民主主義の結合に失敗したことをミヘルスは認めている。ドイツ・リベラルの「反大衆」感情は、北ドイツ関税同盟時代のリベラリスト、歴史家ハインリヒ・フォン・ジーベルの「普通、平等、直接選挙」導入反対の姿勢の理由をなしている。ジーベルによると、普選の権利は「あらゆる議会主義の終焉の始まり」を意味している。それによって、ドイツに「民主主義的独裁の危険な要因」が導入されることになるからである。「このリベラリズムの大衆に対する内心の反発」は——これには、1830年代のフランスでの大衆騒擾が背後にある——、貴族制に対する姿勢にも反映している。つまり、社会主義の影響で乗っ取られるとリベラリストに「危惧」された下院、に対して上院と国王に対する姿勢を変えることになった、というロッシヤーの説が紹介される。

加えて、政治的に、社会主義に最も近いとされるリベラリストですら、帝国議会に表出される「変わり易く、当てにならない人民の意志」を掣肘する必要性を主張していた。国家には、「人民の意志から独立した」、調停的な機能を果たす「貴族制的要素」が存在するのが望ましいからで

ある。

このリベラルの大衆に対するネガティブなイメージを、ミヘルスはどのような意図で長々と紹介したのか。これはミヘルスの「内心」での反民主主義を示唆しているのか。しかし、ルソーの術語を用いれば、「変わり易く、あてにならない人民の意志」は「一般意思」とは一致しないだろう。

この「貴族制の原理と民主主義の原理」の章がとりわけドイツの近代政治の頑固な構造的特性を抜きには十全には理解できないということははっきりしている。

この1世紀の間、ドイツ人インテリはプロイセンの「軍国主義的君主制」を民主主義と和解させようとしてきた。その結果、「多くの理論家と歴史家」が、それを「脱封建化」することで、「人民（ないし、社会的）君主制」とみなそうと自己欺瞞してきた。ミヘルスはそれを、「現実と夢を取り違える誤謬」と断じた。「貴族制と民主主義」というタイトルにはこういうドイツ・リベラルストの理論的「錯乱」に対する警鐘も込められている、といえよう。

「この混乱の中に、ドイツのすべてのリベラリズムの体系的な欠陥が存在する。」というのも、それは1866年以来、戦線が変化したこと（つまり、社会主義に対する党派的な闘争、そして、それと同時的に行われた、ドイツ・ブルジョアジーが完全な政治的解放のすべての試みを、自主的に放棄したこと）を、プロイセン君主による国家統一によって、ドイツの「民主的な青年」の願望が達成されたと、「欺瞞的に主張」することで、ごまかし続けてきたからである。世襲君主制は民主主義とは「絶対に」相容れない。

ドイツの民主化の失敗の原因をブルジョアジーとそのイデオログたちのヴィジョンの内実に求めようとして、ミヘルスは、自由主義者と社会主義者との民主的な協力の展望がドイツでは望めないことを、ここで確認したことになる。しかし、その協力の失敗はドイツのリベラリズム

の側にのみ責があるのか、社会主義の側についてはどうなのか。これは、本書の隠れた執筆動機のひとつである。

次の小括の文章はまさにその SPD 組織の体質の要約といえる。

「近代の政党生活では、貴族制が漸次民主主義の装いのもとに現れ、他方で民主主義の実現は貴族制に浸潤されている。一方で貴族制は民主主義の形式をとり、他方で民主主義は貴族主義の内実を含みもつ。」

モスカも「貴族制の原理と民主主義の原理」において両者の交錯の様を描いているが、ミヘルスのように相互浸透というよりは、双方の「繰り返された闘い」の面に注目する。ミヘルスは、ドイツの民主化にとって最大の障害が世襲貴族制にあると考えていた。それは「人民の意見」とは一致しない。モスカは貴族制を「優生学的」原理と呼称することで、権力の世襲の傾向が厳存すると指摘する。ただ、それが「閉鎖的なカースト」に墮落すると、没落の運命が来ることも指摘する。

モスカの民主主義の定義は、「相続、世襲、既得権、財産ではない、個人の功績と資質の原理」にある。生まれの特権の終焉としての民主主義は、「正義」の原理に適うとさえ考えていたことが伺える。ただ歴史の「経験」は、「優生学的ないし貴族制の原理」が消え去らないことを教えたとし、この原理が、「一旦潰されてもすぐ復活し、しかも、潰した本人たちによって復活させられたことが、何度あったことか」と述べ、それに鑑みると、それには、強固は「存在理由」があるのではないかと推論している。オーウェル『動物農場』を思わせる叙述ではあるが、『政党の社会学』の含意を象徴的に示している。

モスカの真意は、貴族制の原理が民主主義を圧倒することを願望するのでも展望するのでもない。政治上でのエリート交替の面のみに目を向け、結局、歴史とは「シジフォスの労働、永久のむなしい労働」の繰り返しにすぎないとする説を批判する。それでは、「多数者の利益とか、社会全体の利益での改善」を一切認めないことになろう。エリート論は、「懐疑論と宿命論」を「断固」拒否する。「時代の要求」に応える「優れ

た少数者」による交代で、社会は進歩するのである。

そして社会の進歩に民主主義は重要な役割をはたす。

「民主主義の原理は、決して死にはしない、なぜなら、それは人間社会を、未知の目標へと向かってせきたてる一方で、人類を他の種からますます分かつことを狙い、人間とは別種の動物には知られていない、ますます高尚な能力を人間に与えることを目指す、終わりなき運動にとって、不可欠だからである。もし、そういうことを認めるのが本能的だとするのなら、その敵方もまた死にはしないだろうということを想定するのも、やはり理に適っている。その敵方も自己の使命というものを持つだろうし、人間社会の生活の中に職務をもつだろう。」

モスカも現代が民主主義の時代と呼称されていることは承知している。そういう時代でも古代アテネ以来の貴族制と民主制との角逐は止まないというのがモスカの歴史哲学であった。

ミヘルスはこの貴族制（オリガーキー）傾向と民主制の交錯は「社会主義的で革命的な労働者政党」の「内部構造」が最も鮮やかに示すという。「外部」の民主主義と内的なオリガーキー構造の矛盾がもっとも具体的に観察しうるというわけである。

革命政党は「オリガーキー傾向」一般（国家、社会、経済）の否定を旨とし、また目的にして誕生した。

後にエンツェンスベルガーは、革命組織は闘争相手の姿に似てくる、という有名なテーゼをうち出したが、ミヘルスは政党の「綱領」と「起源」⁽⁴⁾、言い換えると、理念的、道徳的な契機を重視する。だからこそ、矛盾といえる。革命はただの自然発生的反乱とは違うし、政党はただの利益団体とは違う。「理論的には、社会主義的で民主主義的な政党の主眼はあらゆる形のオリガーキーに反対する闘いである」という時、ここには基準とする価値観が想定されている。こういう理念と実際とが齟齬

（4） エンツェンスベルガー『政治と犯罪』野村修訳、晶文社選書、1975年。

をきたす原因理由の究明，その「偏見の無い分析」，これが本書の重要な使命とミヘルスは宣言する。

この章の最後に，ミヘルスは思い出した様に，マルクスに立ち返る。

「今日の社会では，経済的と社会的の条件から来る依存状態は，理想的な民主主義を不可能とする。これは留保なく認められねばならない。」

そして，「更なる問題」がこれに加わる。すなわち，（党）組織のオリガーキー問題である。階級対立とオリガーキー傾向の関係や如何。ミヘルスは，ここでは論じていないが，『政党の社会学』の準備作業的著作のいくつかを自分で参照指示している。それを検証することで，『政党の社会学』の世界がより深く理解できよう。